
リリカルなのはStrikerS ~ オタク転生者の生涯 ~

九十九 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはStrikers〜オタク転生者の生涯〜

【Nコード】

N9790X

【作者名】

九十九 流

【あらすじ】

少女を助けるために
トラックに轢かれて
死んでしまった
オタク学生のリリなのでの
奮闘記です。

なお、こちらはオリ主最強、チートものです。

一話 俺が死んだ日（前書き）

どうも。九十九 流です。

初小説、初投稿なので

温かい目で見てください。

一話 俺が死んだ日

今日、俺は死んだ
理由は今から説明しよう
それは学校帰りに起こった

ここは日本のある
ところにいるごく普通の
専門学生の物語である

『なぐんてな、自分で考えてて痛くなってきたわWWW』

俺は神代達也アニメやゲームが好きな専門学生だ

今何をしているかと言うと家に帰っている途中である

『はあ〜今日も、何も無い平和な一日だったな〜』

そんなことを言いながら、俺が家に向かって歩いてしていると

『あの子、ヤバいぞ』

そんな声が周りから

聞こえ始めた周りを見回してみると・・・

10歳位の女の子が

車道の真ん中でうずくまっていた。よく見れば、子猫を抱えている
じゃないか。

そして、それを見た瞬間
俺の体は走り出していた。

理由は一つその子に向かつて
トラックが走ってきていたからだ。

『ウオオオオ!!!』

『えっ?』

もう片方の声は何だ?

反対側からも人が来てたのか
ってそんなこと

考えてる時じゃない

『おい、そこのお前、その子は任せたぞ』

『何を言ってる!』うるせー!!!さっさと行けっ!!!』

『ドンッ!』

俺がそいつの体を押すのと

俺がトラックに轢かれる

コンマ何秒の差だった

『ドゴンッ!』

俺の体が轢かれて地面につく

までの時間はとても長く感じた

(ああ、俺は死ぬんだなあ。まあ、こっから落ちたら即死だもんなあ)

そんなことを考えながら俺は落ちていく。

だが、なぜか心は冷静だった

何故だろうか・・・

もう地面が目前だ。そうして

『グシヤッ』

今日、俺は死んだのであった。

一話 俺が死んだ日（後書き）

どうでしたでしょうか？

本編には2〜3話ぐらいに
入ると思います。

一話 女神様との出会いとチート化していく自分(前書き)

連続投稿です

変な所があったら

感想をお願いします

二話 女神様との出会いとチート化していく自分

前回のあらすじ

少女を助けるためにトラックに轢かれて死にましたWWW

『いやいやWWWじゃねーだろ』

オウ何という一人ツツコミ

『で、ここ何処だ？知らないベッドだ。まあ、それはともかく何故俺は手足、固定されてん』

そう、今俺は手足を固定され拘束状態なのである。
なんでだよ

『それは、貴方を逃がさないためです』

『……ッ、誰だ!』

『私は貴方に解りやすく話しますと女神ですね』

『女神だと!』ということは、俺は死んだのか』

『はい貴方は少女と青年を助けて、代わりにトラックに轢かれて、死んでしまいました。』

『では、なぜに俺はここに居る女神直々にお迎えとは、なんかあるんだろっ』

『・・・っ、貴方なぜそれを』

『俺のオタク脳を舐めてもらっっちゃ困るね〜まあ、差し詰め何かの理由で転生ってところかい』

『凄いですね。正直、舐めてましたよ。まあそれで、貴方を転生させるんですが理由を覚えておきます。貴方は生きていた頃に良いことをとともしてきましたね』

『いや、俺に聞かれても身に覚えが無いんですけど。あと、何時になつたら、自由になれるんですかね？』

『あっ・・・すみません。今外しますね』

スッ・・・

『お〜、取れた取れた。いやこれで楽だぜ。で、転生がどうしたって？』

『あっ・・・はい、で生きていた頃に良い行いをしたので貴方に転生の許可が出たんです。』

『ふ〜ん、で転生先はどこなわけ？』

『えっと、魔法少女リリカルなのはStrikerSの世界ですね』

『えっ・・・まじで!』

『はい。勿論能力付与もしますので、原作ブレイクしても良いですよ。』

『能力だと・・・女神よ、自分で言うのも何だが、良いのかしけると、チートキャラが出来ちゃうぜ?』

『それは大丈夫です。そのような、平行世界が出来るだけですから』

『ふん、じゃあ遠慮無く、能力付与させて貰うよ』

『はい、ではどうぞ』

まずはどうしようか取り合えず身体強化でもしとくか

『まず、初期魔力値AAAで使えば上がる能力と、運動神経と身体能力を技術を遠野志貴と両儀式の力で』

『あら、てつきり私は吸血鬼の真祖とかにしてください。とか言われる物だと』

『いやいや、吸血鬼の体だと流石に何でも出来ちゃうからね』

『そうですね、他には?』

『ネギまの闇の魔法を使えるように、とアーティファクトを二枚欲しいかな』

『アーティファクトはどんな能力を?』

『一つは、俺の記憶や見た武器やアイテムを魔力で作りそのままの能力で使うもの、二つ目は闇の魔法で一度吸収したものを保存して使うもの』

『うん、良い感じに、チートだね、まだまだ行けるよ、どんとこい』！

『おっおう……（なんか女神本性出し始めたな、楽しくなって来たのかな？）で、あとはデバイスだな』

『そうですね、やっぱり欲しいよね。デバイス』

『そうだな、一つ目は待機状態が時計型で、アーティファクトで出した武器やネギまの魔法を非殺傷にする能力で見た目は籠手かな、二つ目は待機状態が指輪で、基本形がナイフ、そのほかに、何種類か変化できる。感じかな』

『他の種類？』

『それは、……って感じで』

『良いねそれ面白いよー！』

『こんなところかな、じゃあ後は宜しく。』

『ほいほい。分かったよじゃあ、世界に送るからね』

『わかった』

『じゃあ最後に楽しい人生を』
スウン

地面に穴が開いた
これはまさか

『ふざけんなって。あゝ落ちるゝゝるうゝ』

こうして俺のリリカルなのはでの物語が始まるのであった

二話 女神様との出会いとチート化していく自分（後書き）

次回から

なのはの世界に入ります

頑張りますので

どうぞ宜しくお願いします

キャラ設定 (前書き)

キャラ設定つくってみました。

また

話の間に

新しく創るかも知れません

キャラ設定

名前：神代 達也

歳：19

好きなもの：アニメ、ゲーム、楽しい空間

嫌いなもの：大切な人を傷付ける人、戦い（人を守るためなら戦う）

アーティファクトの説明

《全てを創る者》

形・・・本型

能力・・・自分のこれまで記憶してきた武器や、アイテム等を登録し、自分の魔力で創り、

創った物をそのままの能力で

使える能力

（創った武器を仲間に渡したり使うことも出来る）

制約

1．自分の見た事のある物のみ（記憶していれば、アニメ、ゲームの物でも出来る）

2．能力が強いほど消費魔力が多くなる

3．武器の扱いは、使う人の

技術による

無限の力を使う者
形・・・籠手

能力・・・自分の見た（記憶した）技、能力をコピーしたものを、
保存し自分の魔力で、詠唱を飛ばして発動できる

制約

1．一度吸収していること

2．記憶の場合、精確な詳細が必要

デバイス

デバイス名：メディア

愛称：メディア

待機中：腕時計

戦闘中：手袋型

能力：殺傷設定の物を非殺傷設定にする

制約：その武器の強さによって常に魔力を消費する

デバイス名：エヴァンジェリン

愛称：エヴァ

待機中：勾玉の形のペンダント

戦闘中：1st ナイフ型

2nd 砲撃型

3rd ナックル型

Final 魔槍

イメージはネギまの影槍術

みたいなもの

制約：魔槍の量は魔力の量による

キャラ設定 (後書き)

キャラ設定はどうでしたか？

説明が下手なので

これで分かってくれると
嬉しいです

次からは本当に本編に
入ります。

こうごきたい

三話 突然なる登場（前書き）

スイマセン

一ヶ月以上開いてしまったて

理由は後書きの方に書きます

三話 突然なる登場

前回のあらすじ

女神と共にチート開発をし
突然穴に落とされる

『うわあああ』

現在、空から降下中なう W W W

『笑える状況じゃないなどうすっかな』

『いや、魔法でも使えば良いじゃないか』

『そっかあ、その手があったか!!』

ちなみに今しゃべったのは
俺のデバイスのエヴァである

『いや、今まで気づかなかったの?』

『気づいてたけどさ、突っ込みを期待してた W W W W』

で、今のはもう片方のデバイスのメデイである

『では、行きますか。【風よ】』

ブワッ スッ

『着地成功かなっ』

『何が『かなっ』だよ気持ち悪いな』

『ちょっとそれは言わない約束だろ』

『そうですねよ、いくら本当の事でも言っても良いことと悪いことがありますよ』

『ちょメデイまで・・・』(泣)

『で、二二どこなん？』

『今検索中です、少し待ってください』

『いや、メデイその時間はなさそうだぜ』

『そうみたいだな。9時の方向から生体反応。数は4つ。』

『検索完了。ここは、ミッドチルダ機動六課の訓練施設のと真ん中です。』

『えっ・・・まじで！ってことは近づいて来るのって・・・』

『ザッ、その貴方、武器を放棄して、何処の誰かを答えなさい) みんな一様戦闘準備しておいて』

『『『『(了解)』』』

『取り合えず、聞きたい事があるんだが、じゃあその髪がオレンジの君、君がリーダーっぽいから、君に聞くけど、君達は俺の敵な

のかなつ?』

『それは、貴方が決めることです。で、武器を捨てて投降するんですか?』

『じゃあ、戦闘準備してる時点で、敵と認識される覚悟はしてたみたいだから、敵として認識するからね。じゃあ、エヴァ、モード1stでSetup』

『しかたないな、Setup』

『みんな来るよ戦闘体制で訓練道理に』

『了解』』

『さつとと、君達の実力見せて貰いましょうか。まずは補助を潰すかな、行くぜ!』

ヒュン

『えっ、キヤア!』

バタッ

『大丈夫だ非殺傷だからな』

俺は初撃油断したところに
一閃を与え一人撃破

『次、モード3rd。そんでもって、マガリアエレベア発動』

ドウン

『えっ、何なのあいつあの魔力量異常だわ』

『そして、アデアット【無限の力を使う者】で、詠唱省略【千の雷】
コンプレクシオー【雷天大壮】』

『えっ、あの人僕と同じ魔力変換資質持ち！』

『ふい〜準備完了つと、これ使つとデバイスが空気になるんだよな・
・まあしゃーないよな次は、あの槍持ったちびっ子だな』

そう呟いた瞬間には

槍の少年の前に行き撃墜を
完了していたのであった

『グフツ！』

そんなナレーションを入れている間にも今度は短髪少女を
一撃で気絶させていた

『ハア・・・手応えねえな』

『いや、普通あの速度は付いて来れないから！どこぞのバグキャラ
とか、コーヒー党代表じゃ無いんだから』

『（何なのあいつ知らない技とか、フォワード陣がほぼ一瞬でやら
れるなんて・・・）』

『さ〜て残りはオレンジだけだな一発や』『ちよつと待ったー！！』

』

『あんだ誰だ？新手の敵かい？それとも話し相手？』

『こちらは話し合いがしたいんやけど話し合いで解決せーへんか？』

『（って言ってますけどどうしますマスター？）』

『（うーんいいんじゃない？エヴァはどっ思っ）』

『（お前の好きにしろ、私はめんどくさい）』

『（じゃあ話し合いで決定）いいぜ話し合っか』

『ほんまかいな！！じゃあ、フェイトちゃん、なのはちゃん、フオワード陣を医務室へ』

『で、場所はここで行くのかい？』

『立ち話もなんやし、ティアナ部隊長室に連れてきてくれへんか？』

『あっ、はい分かりました。今行きます。ではついて来てください』

『はいよー、っとその前に、マギアエレベア解除、それとアベアット、エヴァ、メデイ戻っていいよ』

『それじゃあ、こちらです』

ツカツカツカ

ツカツカツカ

『(きつ、気まずいな)』

『(我慢しなさいあとちょっとでしょ！)』

『着きました。こちらが部隊長室です。』

ウーン

そんな音が似合いそうな

感じで扉が開いたその先には

『いらっしやいです〜』

なんか小さな妖精みたいなのが出迎えてくれた。

正直小さくて

かわいかったりする

『いや〜ホントに話し合いになるとは思わなかったわ』

『で、行きなりだが聞きたいことを手短にそして端的に、30文字以内で、あとそこにいるピンクのポニテの人と、赤いチビスケの説明を希望します。』

『誰がチビスケだよ、ああん喧嘩売ってんのか?』

『(なあ、何か悪い事言ったか俺?)』

『(確実にチビスケだな(でしょ))』』

『(そつか)すまんすまん俺名前を知らないと、外見で名前を勝手に付ける癖があるのさ、だから許してくれないかい?』

『ふん』

『あゝあ怒らせてしもて、あの娘はヴィータ、そしてその隣の人が』

『シグナムだ』

『で、神代君を連れてきてくれたのが、ティアナ、そして妖精みたいなのが、リンや』

『へ』

『で、本題や何で神代君はあそこにいたのか、何故フォワードと戦ったのか?あの、能力や技について教えてくれへんかな』

『ああ、あそこにいた理由は、分からん気がついたら、空から急降下してた、能力については、ノーコメント俺がこの部隊?に協力したら教えるわ、でフォワードと戦った理由は・・・』
『理由は・・・?』

ゴクッ

『その方が楽しいからだぜ!』
ズゴッ

『何やその理由マジでいつてんのか?』

『ああ、力を計る意味もこめてな』

『まあええわ、この事はあとあと、できなり急降下つてことは、次元漂流者かいな』

『まあ、そうなるかな。俺としては、行く当ても無いしこの部隊で保護してくれると嬉しいんだがな。勿論保護してくれたらあんた達を手伝わせて頂け』

『ほんまか！じゃあ、それでええか？ええなら屈託魔導使の試験を受けてもろつて、受かったらOKや、どうする』

『ああ、それでいい。で試験内容は？』

『筆記と実技、そしてレアスキル持ちだけやけどその試験、この3つや』

『早い方がいいから3日後とかに出来ないか？』

『連絡してみないとわからんがもしそうなったときは、筆記とかどうするん？』

『まあ、大丈夫だろ、なあ』

『まあ、大丈夫じゃないのか？お前頭いいだろ』

『マスターの頭脳なら問題無いかと』

『すごい自信やなまあ、掛け合ってみるわ』

こうして、機動六課入りを

果たす権利を得た、達也であったはてさてどうなることやら

次回へつづく・・・

三話 突然なる登場（後書き）

《今回のあとがき》

達也『やゝ、今回から始まりました。このコーナー』

エヴァ（これから『エ』）

『何が始まりましただ一ヶ月以上も行方くらましおって、どこ行ってたんだ！あの作者は』

メデイ（これから『メ』）

『まあまあ、エヴァあまり怒らないであげて。』

エ『なんでだよちゃんとした理由があんのか』

作者『実は、今ちまたで噂のマイコプラズマ肺炎にかかりまして』

メ『しかも、修学旅行明けでさあ書くぞって意気込んでた時らしいの』

エ『マイコプラズマっていうとあの天皇陛下がかかってたやつか』

達也『あれは、咳もずっと続いて、熱出るらしいしな、そりゃつらいわ』

作者『学校からも出席停止喰らって家で寝込んでたんです』

エ『あゝすまん私が悪かった』

作者『これからは、最低でも一週間に一回は更新しますので』

達也『こんな作者ですがこれからも見てやってください』

四話 能力説明とみんなの紹介（前書き）

ちよつとキャラの口調が

変もしれませんが

ご了承ください

四話 能力説明とみんなの紹介

前回のあらすじ

フォワードと戦った後、はやてがきて話し合いをして、機動六課に保護されました

『ほな、フォワードが起きたら紹介しよか』

『俺はいつでもいいぜ。でよ部隊長さんよ、俺はそれまでどこにいればいいわけ？』

『うーん、ほな私に先に能力について教えてくれへんか？』

『ああ、いいぜ』

『ほな決まりやな。シグナム達も、もう戻ってええで』

『分かりました。主はやて』

ウイーン

そんな音をBGMに
シグナム達は仕事に
戻って行った

『ほな、早速やけど話してもらおか』

『うむ。まずデバイスについてだな。このペンダントの方はエヴァ
こいつは武器の方でな、モードが変わるんだ』

『変形型のデバイスか』

『そそ、1stがナイフ、2ndが拳銃、砲撃型、3rdがナックル、でFinalが魔槍だな』

『魔槍？魔槍ってなんや？』

『魔槍っていうのはな、文字通り魔力でできた槍のような物だよ。あるだろ、魔力刃とかその応用だな。』

『じゃあ槍型なんかいな』

『そうゆう訳じゃない。魔力というのは、基本的に形は自由だから、それを利用して、鞭の様に使ったり、まとめて槍にしたり、魔力刃にしたり、色々と出来る訳なんだよね。』

『ほ、形が自由だから応用が利くと』

『そうゆうことだな。まあ、これは実際に見た方が解るから。まあそのうち見る機会もあるだろうよ』

『それもそやね』

『ほれ、エヴァあいさつすれ』

『ああ、私がエヴァだ。この愚鈍で最低な、糞マスターのデバイスを仕方なくやっているものだ。こんなマスターだが仲良くしてやってくれ。』

『おいエヴァ、それは酷くないか！それはストリート過ぎるぜいくら慣れているといつても、それは心に響くぜ。・・・くそっ、ツンデレのくせに（ボソッ）』

『おい聞こえてるぞ、誰がツンデレだアァン、今どこでデレたんだ？』

『まあまあ、喧嘩しーなにしてもやけに、感情のはつきりしてるデバイスやね』

『まあな、で腕時計の方がメディア、これは特殊なデバイスでな。能力が殺傷武器を非殺傷にするデバイスなんだ。』

『うん？それに何の意味があるねん。もともと非殺傷やんけ』

『そりやそうなんだがな。まあ違う能力にも関わってくるから頭に入れといてね。じゃあ挨拶よろしく〜』

『こんにちわ。私はメディアといいます。これからよろしくお願ひしますね。はやてさん。私の事は、メデイと呼んでください。』

『あっはい御丁寧にどうも。でその、ほかの能力とは？』

『この、二枚のカードです。一枚目は【全てを創るもの】といって俺の記憶してきた武器やアイテムを登録して、それを自分の魔力で創って、そのままの能力で使えるんです。』

『ハア！？なんやそれえらいチートやん』

『そうでも無いですよ。制約もけっこうありますし。』

『つまりあれやろ、ゲームとかの回復アイテムとかを創って使うこともできるのやろ。武器とか』

『そうですね問題はその武器なんですよ。質量兵器の所有は犯罪ですし、これで創った武器は、殺傷設定なんですよ』

『そゝなんか。とゆうか、殺傷設定じゃだめやんけ!』

『そのための、メイなんですよ。覚えてますか能力』

『もちろん、確か・・・武器を非殺傷に・・・もしかして!』

『そうです。この能力で創った武器を非殺傷にするんです。』

『ほゝ。そのための、メイさんか』

『そつゆつことなんです。』

『じゃあ、最後の質問や。あのいきなり見えなくなった技はなんなん?』

『あゝあれですか。禁則事項です。』

『いやいや、いまさっき話すゆつたやんけ』

『いや、話してもいいんですけど、理解できるかどうか・・・なあ』

『?どつゆつことや?』

『簡単に説明しますと、部隊長は、精霊の存在は分かりますか?俺が使っている魔法は精霊の力を借りて、その力を利用してもらってるんです。』

『すまん、全く意味がわからへんのやけど・・・』

『まあわかんなくてもしょうがないですね。部隊長達の使ってる魔法とは、根本から違いますから・・・。そうですね、説明するとなると、魔力変換ありますよね?』

『あるな、電気やら炎やら』

『そうです。その強化版を、色々な能力付きで使える感じですかね。例えばさつきなら、雷を纏って雷と同じ速さで動けて、当たった相手に電気ショックを与える感じですかね。』

『ハア?雷の速さってどれくらいや』

『確か・・・なんぼだっけ?エヴァ』

『たしか、秒速150Kmとかだったはずだぞ』

『ハイ?150!早すぎや対応できる人いるんかいな!?』

『いますよ。弱点とがありますし。』

『弱点?』

『例えば、本物と同じ様に、先行電流、ストリーマーともいいますが、それが出るので、カウンターの餌食なんですよ。』

『は〜デメリットもあるんやねちゃんと』

『まあ、世の中そんなに上手くないって事ですね。』

『そうやな〜。これであらかた質問も終りや、みんなが起きるまで』
『はやてちゃん、フォワード陣が目を覚ましましたよ』
『ナイスタイミングやな。で怪我はないんか？』

『はい。不思議なことに外傷一つありませんでしたよ。』

『そーなんか、じゃあ部隊長室に来てほしいって伝えてくれるか？
あとシャマルも一緒にきてな。』

『分かりました。』

プツン

ピンポンパンポーン

『え〜前線メンバーは部隊長室に今すぐきてーな。急いでな〜。』

ピンポンパンポーン

『音軽いな〜』

『もう少し待っててないまくと思っから。』

『失礼します。』

『来た見たいやね。まだ全員揃ってへんから楽にしてな。』

『失礼します。』

『来た来た。これで全員やな。じゃあ、みんなに集まってもらったのは他でも無い。この人のことについてや。』

『え、神代達也と言います。まず、フォワードの皆さん、いきなり戦闘吹っ掛けてスイマセンでした！！！』

『へっ？』

『達也は、すごい速度でいわゆるジャンピング土下座をしたのであった。』

『いやいや、いきなりそれはないやろ。ほれ、ちゃんと自己紹介しな』

『そうですよ。いきなり土下座されても、こっちも困りますから。』

『そうか？じゃあ、改めて……ここで屈託魔導使として保護されました。神代達也です。これからヨロシク。』

『えー！！』

『耳痛て』

『どじゆじゆと？はやて？』

『じつはな、かくかくしかじか』

閑話休題

『と、いう訳らしいんや。で協力してもらおう事にしたんや。』

『そつゆづことですか・・・』

『そや。じゃあこつち側も自己紹介といこうやないか。』

『じゃあ、まずは私からね。私はスターズの隊長の高町なのはって
います。教導官をやってます。なのはって呼んでね。』

『ああヨロシク。』

『次は私で。こんにちは、私はライトニングの隊長のフェイト・テ
スタロツサ・ハラオウン。フェイトって呼んでね』

『おうヨロシクな』

『私の事は知ってるなヴィータだスターズの副隊長をやってるヨロ
シクな』

『私の事も知っているな。シグナムだライトニングの副隊長をやっ
ている。ヨロシクな。あと今度、模擬戦でもしないか？』

『ああいいぜ。ヨロシクな』

『私は、ザフィーラと言う。男同士よろしく頼む。』

『うおー犬が喋った!』

『私は狼だ・・・』

『次に、私はシャマルよ。医師をやってるわ。ヨロシクね。』

『ああ、ヨロシク』

『じゃあ次はフォワード陣いこか。』

『はい、スターズ3のスバル・ナカジマです。よろしく願いします!』

『同じく、スターズ4の、ティアナ・ランスターよ。よろしく』

『お〜元気だな。いい声だな。これからヨロシク』

『ライトニング3のエリオ・モンディアルです。これからよろしく
お願いします。』

『ライトニング4のキャロル・ルシエです。よろしく願いしま
す。』

『へ〜小さいのに頑張るんだな〜礼儀正しいし。よろしくな。』

『これで、全員か?ほなこれで解散にしょか。』

『いや、待つてくれ・・・大事なことを聞いてないぞ。』

『なんや？いきなり真剣な声して。』

『それは・・・俺の部屋はどこになるんだ結局』

『それなら、空き部屋があるからそれつかいなや。』

『誰が案内してくれないか？』

『私が行こう』

と、言ったのは

珍しくシグナムだった

『シグナムええんか？』

『はい。主はやて書類もあらかた、終わりましたので』

『じゃあ頼むわ。』

『はい。では行こうか』

『はいよ。ヨロシク』

『じゃあ、今度こそ解散！』

『で、なんでまたシグナムさんが？』

『なんだ、不満なのか？』

『いや、余り社会的に見えなかったというか苦手そうだったからさ』

『何と言つか、興味が湧いてな。というか、私の事はシグナムでいいぞ。』

『ふん、わかったじゃあそう呼ぶからな。』

『ああ。お前からは何か意志を感じるからな。』

『意志ね〜。』

そんなことを話している間に、宿舎に着いて、ただいま部屋の前なう

『そら、着いたぞ。家具とかは着いて居るから、足りなかったら、買いに行け。』

そうゆつと、シグナムは歩きだしてしまった。

『シグナム〜ありがとな〜！』

『ああー！』

というと、本当に行ってしまった。

『さて、中入るか。』

ウィーン

『おお〜結構広いな〜。さて疲れたし寝るかな〜』

『明日は早く起きて、自主練でもするかな。エヴァ、メデイ、明日は5時に起こしてくれないかい？』

『仕方ないやつだな。』

『分かりました。ではその時間までお休みなさい。』

『ああ、お休み』

こうして、波乱で怒涛な一日が終わった。

四話 能力説明とみんなの紹介（後書き）

《第二回あとがきのコーナー》

達也『いや〜やってまいりました。このコーナー。今回で二回目ですよ』

エ『おい、糞作者』

作者『はいなんでしょっか？』

エ『私達の出番少な過ぎないか？私は5回くらいで、メデイに関して言えば2回だぞ（怒）』

作者『すいませんしたー！！』

メ『理由はあるんでしょっね〜（ゴゴゴゴゴ）』

作者『勿論ありますよ。その理由はあそこで絡ませると、長くなりすぎになるような感じがしたので止めました。』

達也『なんだ理由あるんじゃない、てっきり絡ましかたが思い付かないとばかり・・・』

作者『違いますよ！酷いですよ！泣きますよ！』

エ『まあ、これからもちゃんと頑張っつて、定期更新していけよ。飽きやすいんだから。』

作者『分かってますよ。エヴァさん』

メデイ『皆さんからの感想、指摘など、受け付けております。どし

どし、お願いしますね。』
達也『それではさようなら』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9790x/>

リリカルなのはStrikerS ~ オタク転生者の生涯 ~

2011年12月9日01時53分発行